

砂漠体験記

—ナミブ砂漠のナラ採集フィールドトリップ—

飛山翔子*

アフリカ大陸南西部に位置するナミビア共和国の大西洋岸には、国名の由来ともなっているナミブ砂漠が南北に細長く広がっている。砂漠に強い憧れを抱いていた私は、ナミブ砂漠の真ん中に調査地を決めた。そんなところに人が住めるのかと疑問に思われるかもしれないが、ここでは季節河川・クイセブ川に沿って線状に集落が形成されている。ここに住む民族はトップナールといい、古くから「ナラ (!Nara)」と呼ばれる植物を利用し、暮らしてきた。

ナラとトップナール

「ナラ (学名 *Acanthosicyos horridus*)」はウリ科の多年生草本で、ナミブ砂漠の固有種である。完熟した果実は非常に濃厚で甘みが強く、とても美味しい。味をほかのものにたとえるならば…夕張メロンだろうか。生食のほか、トウモロコシ粉の練がゆに果肉のペーストを混ぜ込んで食べたりもする。種子も人々から好まれて食されており、村の人たちは大人も子どももポケットにナラの種を詰め込んでいる。そして自分のポケットが空にな



写真1 ナラの果実

採集期は毎年12月～5月頃。採集量は近年の環境変化や気候変動の影響を受けて減少している。

ると「アライ オウドレ (種、ちょうだい)」と言って他の人に半分分けてもらうのだ。種の殻を奥歯で割る「カリッ」という小気味良い音が聞こえない日はなく、村のあちこちに殻が落ちている。その一方で、種は近くの街で売ると収入が得られるので、彼らにとって貴重な現金獲得源にもなっている。

8000年以上もの食用の歴史がありながら、ナラは現在も栽培化されておらず、トップナールは毎年結実期になるとナラ採集(フィールドトリップ)に出かける。昔は採

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 (現 NTC インターナショナル株式会社)

集期になると各世帯が「ナラフィールド」と呼ばれるナラの群生地へ家族総出で向かい、仮小屋を作ってそこで暮らしながらナラを採集していたが、現在は男性が2～5人のグループを作って、2週間ほどのフィールドトリップを繰り返す形態に変化している。私は調査のため、計3度のフィールドトリップに同行した。

愛車と月夜のドライブ

ナラフィールドは村から10kmほど離れた場所にあり、移動にはドンキーカート（ロバ車）を使う。荷台の作りはなんともワイルドで、何度も補修した跡がある。運転席として木の板が一枚載っているが、固定されていないので走行中にずれたり落ちたりする。私は初めてドンキーカートに乗った時、怖くて泣いた。想像よりもスピードが速く、地面からの衝撃が直に伝わってかなり揺れるので、身体が投げ出されないように踏ん張っていなければならなかった。これまで生きてき



写真2 ドンキーカート

砂漠の厳しい環境下でも重荷を運んでくれるロバたちは、採集者にとって一番のパートナーだ。

た中で、あれほど命の危険を感じたことはない。天に祈りを捧げながら一刻も早い到着を願っていたが、なんと最後の最後で運転手と私が座っていた板が段差の衝撃で落っこちたのだ！荷台に乗っていた人たちは大笑い。私は半泣きである。ジェットコースターが大好きな私も、ドンキーカートのスリルには耐えられなかった。しかし恐ろしいことに、人間郷に入れば郷に従うもので、その後2、3回するとすっかり慣れて上手く乗れるようになり、時には自分で運転するまでになった。

とあるフィールドトリップへの出発日。私は朝から旅支度を整えていたが、なかなかゴーサインが出ない。その日は風が強く、砂嵐がひどかった。そわそわしている私に、居候先の父・ヘルマンは「風が止んだら出発しよう」と言った。ところが結局風は収まらず、日が暮れて夜になってしまった。「明日に延期か…調査も後手後手だし、これから大丈夫かな」と不安に思いながら寝る用意をしていると、ヘルマンが「ショウコ、そろそろ行くよ」と言ってきた。私は耳を疑った。時刻はすでに夜の10時を回っている。もちろん外は真っ暗だ。戸惑う私にヘルマンは空を指さし「やっと月が出てきたから」と言ってニヤッと笑った。ドンキーカートに荷物を積んで、私たちは10時半過ぎに村を出発した。初めは真っ暗と思っていたが次第に目が慣れてきた。この時運転していたフェダンは、進路が月に照らされるようにうまく方向取りをしていた。風はもうすっかり止んで、ただただ静かな夜の中に私たちはいた。真夜中に間近で見る砂丘は、昼とは全く違った印象で、

その向こうには何か別の世界が広がっているのではないかと思わせるほど神秘的だった。この時の3時間ほどの月夜のドライブを私は一生忘れない。

フィールドトリップの必需品

ナラフィールドでの1日は、紅茶に始まり紅茶に終わる。村でも毎日朝食代わりに砂糖のいっぱい入った紅茶を飲むが、フィールドトリップ中の紅茶の消費量はその比ではない。採集では役に立てることがないので、せめて紅茶くらいは私が淹れようと率先してやっていたのだが、あまりにも回数が多いので、しまいには自分が給茶機ロボットになったのではないかと錯覚するほどであった。彼らは濃い紅茶が好みで、ティーバッグは原則1杯につき1個使用。それなので25個入のティーバッグを3人しかいないのにたった2日足らずで切らせてしまったこともある。しかし無限にティーバッグがあるわけではないので、ストックがなくなったら、一度使ったものを干して再利用（二番煎じ、三番煎じ）したりもする。「そんな貧乏くさいことをするくらいなら、最初から節約して使ったほうがいい」と思って、私が3人分を1個のティーバッグで淹れたら、ヘルマンに「なんでまだたくさんあるのにそんなことをするんだ」となじられた。「いやいや、だって絶対後でなくなって困るでしょ。この前もそうだったし」と反論するが聞き入れてもらえない。

納得がいかない私は、策を講じることにした。この次のフィールドトリップの際、自分のリュックにティーバッグを1箱隠しもつ

て行ったのである。案の定、準備していった分は途中でなくなり、みんなが途方に暮れたところで「ジャジャーン！」と言って新しいティーバッグを出す時の優越感といったらない。歓声と賞賛の声に笑顔で応える。完全勝利に気分を良くした私は、とびつきり濃くて甘くて熱い紅茶を淹れた。

ところでなぜこんなに紅茶問題に真剣に取り組むのかというと、紅茶不足は私にとっての死活問題につながるからである。紅茶が切れると皆一様に機嫌が悪くなり、極端に口数が減る。そこではもう聞き取りができる雰囲気ではなくなってしまい、もっと困ったことには、ナラ採集もろくにせず、「もう帰ろう」となってしまうのである。ナラ採集の一連の流れを間近で見て経験して記録しないことには、私の研究が成り立たないので、必死だったというわけだ。そして実は紅茶と並んでタバコもナラ採集者にとっての必需品で、私は「隠しタバコ」も用意しなければならないのであった。

「リアル・トップナール」

ナラ採集は、フィールドを歩き回って果実をつけた株を探すところから始まる。見つけたらもぎ取ってひとまず近くにまとめて置き、数日後に改めてドンキーカートで回収に来る。キャンプにまとまった数を集められたら皮剥ぎ、繊維質を断ち切るための煮詰め作業、種の取り出しと続き、フィールドトリップ中にこのサイクルを2、3度回す。この中で最も大変なのは、初めの巡回・採取作業だろう。日中の気温は優に30℃を超え、午後



写真3 ナラ採取の様子

以前は親から子へ受け継がれていた採集に関する技術や知識も、最近は共有されなくなってきている。

には強風で砂が巻き上げられて目が開けられないほど厳しい環境になる。そしてナラは生育とともに、根元に飛砂を溜める性質をもっており、古いものは10m近く高さのある砂山（マウンド）の上に生育しているため、採集のためにはマウンドに登らねばならない。しかし足元の砂はどんどん崩れていき、途中でトゲのある枝に足を取られたりして思うように登れず、想像以上に体力を消耗する。周りに休憩できるような木陰もなく、喉の渇きは限界に達するが、水を携帯するのは私だけである。採集者たちは、ナラを食べて水分を摂るから大丈夫なのだという。

私は足手まといになりながらも、フィールドワーカーの意地で付いて回っていると、ある時、ヘルマンから白茶けた小片を見せられた。それは土器の破片だった。よく見ると周りにも同じようなものがいくつか転がっている。「コイコイポットだよ」とヘルマンが教

えてくれた。「コイコイ」とは、狩猟採集を生業とするナミビアの先住民族で、トップナールの先祖にあたる人たちのことだ。私は遙か遠い昔に思いを馳せた。コイコイ人はスプリングボックかダチョウか何かの大型動物を仕留め、この場所で火をおこして食事をしたのでろうか。もしかしたら彼らもまたナラを食べて渇きをしのいでいたのかもしれない。強く逞しい先人たちと同じ大地を踏みしめているんだ、という感覚がじわじわと身体に広がり、元気が湧いた。その後は段々と風が強くなり、最後には容赦なく砂が飛んできて顔も目も痛くなったが、私はヘルマンに遅れまいと必死に歩き続けた。

夕方、キャンプに戻ると疲れとともに達成感が感じられ、心地がよかった。するとヘルマンがやや遠慮気味に「鏡、もってる？顔を見てみて」と言ってきた。「なんだろう、そんなに疲れた顔してるのかな。いや、日焼けで赤くなっているのか？」と不安に思いながら二つ折りの鏡を開き、覗きこんでみて驚いた。…真っ黒！なんと砂が顔一面にこびりついていたので。この醜さは自分で見るのものなかなか耐え難い。ずっとこんな顔でいたのかと思うと、顔から火が出そうだった。一方ヘルマンは「これでショウコモリアル・トップナールだ」と笑い転げていた。私はゴシゴシ顔を洗いながら「新婚旅行でナミブ砂漠に来るのは絶対にNG」と心のフィールドノートに書き留めた。

捨てられたペットボトルの行方

—ウガンダ・カンパラのリサイクル事業—

浅田 静香*

ウガンダの首都カンパラで乗合バスに乗っていると、巨大な「ペットボトルの袋」を見かけることが頻繁にある（写真1）。古い蚊帳から作られた大袋に、使用済みの空きペットボトルがめいっばいに詰めこまれており、その巨大な袋を自転車の後部に乗せて押している人や、空き地にそのペットボトルの袋が置かれている光景をよく目にする。かれらがペットボトルを何に使うのか人びとに尋ねると、たいてい同じ答えが返ってくる—「チャイニーズ（中国人）に売るのよ」と。

聞き取りや地方紙などで情報収集を進めていると、一部のカンパラ市民は、道端やごみ

捨て場にポイ捨てされた空きペットボトルを拾い集め、回収業者に売って現金収入を得ていることが判明した。空きペットボトルは1キログラムあたり600ウガンダ・シリング（約24円）でリサイクル業者に引き取られる。ある人は1ヵ月に300～500キログラムの空きペットボトルを業者に売って、250万ウガンダ・シリング（約10万円）を稼いでいるという [Masaba 2013]。かれらがペットボトルを売る相手はウガンダに16もあるリサイクル業者で、そのほとんどが中国人によって経営されている。

空きペットボトルはカンパラの市街地だけで回収されているのではない。カンパラの中心部から北へ14キロメートルに位置するチテジという地区には、カンパラ唯一のごみ集積場がある。私がこの集積場へ見学に行くと、まず目に飛び込んできたのは、ごみをあさるおびただし数のアフリカハゲコウであった。しかし、よく見るとそのハゲコウの群れに交じって、青い作業着を着た人が何やら作業をしている。集積場を管理する人かと思いきや、それにしても人数が多すぎる。ハゲコウの数と変わらないほど多くの数の「青い作業着の人」がいる。かれらの男女比は



写真1 街中の空地に集められた空きペットボトルの袋

ここで業者によって回収されるのを待つ。（2014年2月10日撮影）

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

半々ぐらいで、何やら会話をしながら作業している。

この「青い作業着の人」の正体は、カンパラ市（Kampala Capital City Authority）によって雇われたプラスチックの仕分け員であった。巨大なごみの山から、かれらはペットボトルやレジ袋を色別に拾い分けている。集積場内を少し歩き回ると、その麓に透明なペットボトルの山、黒いレジ袋の山、緑色のレジ袋など色とりどりの小さな山を見ることができ（写真2）。これらすべては「青い作業着の人」によって分別されたものだ。

こうして回収されたペットボトルが工場でどのように処理されるのかが気になり、ある日私は、カンパラ中心部から車で30分ほど西へ行った場所に位置するペットボトルのリサイクル工場を見学した。ここではチテジやカンパラの市街地から毎日、廃棄された大量のペットボトルがトラックで運ばれてくる。運ばれてきたペットボトルは、工場内で再度、透明や緑色などの色別に仕分けられ、ベ

ルトコンベア式の機械に投入される。その機械のなかでペットボトルは洗浄され、小さなチップ状に粉碎される（写真3）。粉碎されたペットボトルは、麻袋に詰められ中国へと運搬され、中国国内の工場では、チップが繊維にまで分解され、カーペットや服に再度生まれかわるそうだ。

1日に工場内で処理できるペットボトルの量は17トンである。しかし1日に工場へ運ばれてくるペットボトルは約40トンにものぼり、工場の敷地内に蓄積されていく量のほうが圧倒的に多い。実際に、工場を見学した8ヵ月後に同じ工場の前を通りかかると、敷地の壁の一部が崩れ落ち、崩れたレンガの上にペットボトルが流れ込んでいた。

農村では調理油や調味料を入れたり、子どもの遊び道具にリメイクされたりと、貴重な資源であるペットボトル。だがカンパラでは再使用される量よりも廃棄される量が圧倒的に勝っている。もともと瓶でのみ販売されていた炭酸飲料製品も、現在ではそのほとんど



写真2 チテジの廃棄物集積場の様子
中央部と左手奥の袋が分類されたプラスチックである。尾根部にアフリカハゲコウがいるのが見える。（2013年6月4日撮影）



写真3 リサイクル工場にて
ここからペットボトルが機械に投入されていく。時間差で異なる色のペットボトルを粉碎する。（2013年7月11日撮影）

が500ミリリットルのペットボトル容器でも生産され、大型のスーパーマーケットだけでなく、郊外の小さな商店でも販売されている。最近では350ミリリットルサイズのペットボトル製品も登場しはじめたほどだ。

リサイクル工場の数が増えたり、各工場の規模が拡大したりすれば、増加するペットボトル廃棄量にも対応できるのであろうか。ウガンダにおける具体的な統計が発表されていないため、よりリサイクル産業が進んでいる日本の例から、この問いについて検証してみたい。

日本国内では現在、市町村や事業によって販売量の90.4パーセントを占める52万6,800トンのペットボトルが回収されている(2012年)[PETボトルリサイクル推進協議会 2013a]。回収されたペットボトルのうち、リサイクルされているのは79.9パーセントである。¹⁾つまり、日本では回収されたペットボトルのうち、2割を占める42万800トンがリサイクルされていないことになる。容器・包装リサイクル法が制定され、リサイクルが本格化しはじめた1995年のPET樹脂の生産量自体が14万100トンにすぎなかった[PETボトルリサイクル推進協議会 2013b]ことを考えると、20年前と比べて多量のペットボトルが現在、リサイクル以外の方法で処理されていることになる。

1995年当時と比べると、現在の日本では、ペットボトルを回収やリサイクルできる技術や設備は整ったかもしれない。実際に、1995年のPET樹脂の回収率は1.8パーセントにすぎなかった。しかし、廃棄されるペットボトルの量はリサイクルできる量以上に増加している。さらに、ペットボトルをリサイクルする機械を動かすのにも、莫大なエネルギーを消費する。このまま世界各地で増加するペットボトルの廃棄量に合わせてリサイクル技術が向上さえすればいいのか、疑問に感じてしまう。

「リサイクルは金にはなるけど、環境問題の解決にはならない」と、カンパラ市内にあるリサイクル工場の従業員は語る[Masaba 2013]。リサイクルさえすれば環境に優しいわけではない状況は、日本や欧米諸国など先進国だけではなく、アフリカでも深刻な問題となりはじめています。

引用文献

- Masaba, J. 2013 (Feb. 2). Recycling business to ease city's plastic waste problem, *New Vision*.
 PETボトルリサイクル推進協議会. 2013a. 「PETボトルリサイクル年次報告書2013」〈http://www.petbottle-rec.gr.jp/nenji/2013/pdf/pet13_2013.pdf〉(2014年6月2日)
 ————. 2013b. 「回収率推移など」〈<http://www.petbottle-rec.gr.jp/data/transition.html>〉(2014年7月2日)

1) PETボトルリサイクル推進協議会[2013a: 6]に示された、「国内向け回収量」と「国内再資源化量」をもとに筆者が計算した。なお、一般的に使用される「リサイクル率」とは、国内で再資源化されたペットボトルの量と輸出されたPETボトルの再資源化量を加算し、販売量で割ったものである[PETボトルリサイクル推進協議会 2013a]。

少数言語の次世代

—タイで出会ったモン語の若い担い手—

和田 理 寛*

最古のタイ語資料は13世紀末とされるが、それより数百年遡るモン語 (Mon) 刻文がタイ国内各地で見つまっている。タイ系の政権が勃興する以前、中部地域にはドゥヴァーラヴァティ、北部にはハリブンジャヤといったモン系の勢力があったと考えられている。その後も、隣国ミャンマーからのモン移民を受け入れつつ、近年までタイの地にはモン語世界が点在していた。

ところで今日のタイでは一部国境地域を除き、若い世代が少数民族のモン語を話す光景はほとんどみられなくなった。仏教僧がモン語の読み書きを教え、少年たちの音読練習の声が村の僧院に響いていたのも現在の年配者の経験に懐かしい昔の話である。そうしたタイ化に抗し中高年層のほんの一握りの人たちが言語の継承運動を展開するが、なかなかうまくいかない。彼らは「周りには愚か者と言われるけどやらずにはいられなくてね」と自嘲的である。モン語資料の歴史が古い分、その自負と今のモン語の非経済性との隔たりが、彼らの焦燥に輪をかけているようにもみえる。

そんななか、フィールドで2人の変わった若者に会った。彼らは意図してか否か、モ

ン文語の現在最後の継承者であった。

2年前、私はバンコク隣県の某モン寺で厄介になっていた。旧正月である灌水祭 (水かけ祭) の日が目の前に迫ると、夏の気怠さの来襲を祭へと昇華させるがごとく村は華やいだ空気に包まれる。

ちょうどそのとき比丘として同じ寺院に住していたのがセーム君であった。彼は20代になったばかりだが、モン語を流暢に話せるという点で同世代の他の僧のなかで特異であった。

我々の共通点といえばモン文語学習者であることだ。彼は、出家前に村の年配女性チャラート氏 (70代半ば) からモン文語を教わった。チャラート氏は女性ながら、幼少期に自宅で父親からモン文語を学んだ珍しい例であり、その能力は男性に劣らないばかりか村でも卓越している。セーム君は僧の身分となつてから、女性と距離を置く必要もあり、寺院にて住職から一対一でモン文語を教わることになった。同村のモン文語教育が絶え随分経った今日にあって、彼は教師に自ら懇願する形でその学習に取り組んでいた。

ところでこの寺院にはモン文語に長けた年配僧、ングアン師 (70代後半) がいた。私

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 セーム君



写真3 チャラート氏



写真2 ングアン師

は、寺院住まい中の面倒をみてくれた他の僧との折り合いもあり、同じ寺にいながかなかなングアン師に会いに行けず^にいた。それにングアン師は若年者にとって「おっかない」存在であった。それはセーム君にとって

も例外ではなかった。しかし、それは我々の先入観に過ぎなかったようである。ある晩、私が仏教儀礼についてひとりで話を伺いに行くと、師は大変親切に解説してくれた。笑顔はなくとも、それは内面の優しさとは無関係であるようだった。セーム君はいつしかングアン師の弟子となり、モン語の貝葉書を使って学ぶようになった。彼はングアン師の説法すなわちモン語の本生譚^{ジャータカ}読み聞かせの技術に強く憧れていた。

夏が終わり、雨の季節になると僧は3ヵ月間僧院に籠^{あんご}って修行に励む。出安居の儀礼は、この雨季籠りの終わりと、涼しい乾季の到来を告げる。この寺では4日間かけて国民的文学『布施太子本生譚』全13章を僧が交代で読み上げる。乞われれば妻子までも差し出す太子の物語に、白衣の年配持戒者たちは床に直接座り合掌の姿勢で耳を澄ます。今年出家した若い僧たちも出番をもらいタイ語で各自担当の章を読み上げる。もともと一時

出家を予定している彼らだが、還俗前に、この雨安居を終えて一段と僧らしくなったその姿を村の篤信な年配者たちの前で披露するかのようである。

最終日、第 12 章の担当はセーム君である。今年、彼は若い僧で唯一モン語による読み聞かせを行なうことになっている。立派な説法用の高台に座った師を見上げる持戒者たちの最前列には、かつてモン文語を教えた在家女性チャラート氏が丸眼鏡の奥にこそばゆい笑みを湛えている。モン語説法の節回しも冴え、雨安居を通してングアン師と重ねてきた勉学の成果を発揮する場となった。国境地域以外のタイ国内において、今日、若い僧のモン語説法の機会に会うことはまず無いだろう。

一方、ングアン師は止住僧のなかで最多の 4 章分の担当が予定されていた。しかし、今年は結局最終日まで師が姿をみせることはなかった。師は出安居直前に体調を崩し急遽入院していた。説法台の後ろにはングアン師の名前の入った説法スケジュールが置かれたままである。そして、セーム君の説法のちょうど 1 週間後にングアン師は逝去した。突然の訃報であった。

所変わり、ここはバンコクから 650 km 以上北上したチェンマイ隣県の某モン集落である。モンの女王チャーマデーヴィーの伝説が残る町にほど近い。今から 4 年前、私は友人たちとともに 3 人で村を訪問した。誰も知り合いのいないなか飛び込みで向かった先で地元の人から親切にしてもらったことが記憶に新しい。

このとき知り合ったトー君は当時高校 2

年生であった。彼は持ち前の人当りの良さを発揮して、村内の案内に留まらず、近くに有名な仏塔があるからと半日ばかりで連れて行ってくれた。このトー君は流暢にモン語を話す。さらに珍しいことに、この年代でモン語の文章をかなり読むことができる。

彼にモン文語を教えたのは年配男性在家者のブンミー氏（70 代後半）である。この地域は、寺院での男児に対するモン文語教育が早くに廃れ、ブンミー氏の子どものころには既に行なわれていなかった。そのため、村でモン文語に精通した者は年配者でもかなり限られているようである。ブンミー氏自身は青年期に伝統薬の民間治療師からモン文語を教わっている。

我々がモン語教育に関心を寄せると、トー君はブンミー氏に連絡してくれると言った。後日、町で療養中であったブンミー氏が、我々と会うためわざわざ村に戻ってきてくれるという一報を受けて我々は再び村へ向かった。ブンミー氏は定年後、地元のこの村で子どもたちを対象に無償のモン文語塾を開いた話を聞かせてくれた。ただし、他の集落同様、集まった学生は徐々に減っていく傾向にあった。結局、モン語を話せる世代もいなくなり、時勢に逆らうことはできずおよそ 7 年後には閉室した。それでも一部の学生にはモン語の読み書きを伝えることができた嬉しそうであった。そのなかで最も優秀だったのが当時小学生のトー君である。

私がこの村を再び訪れるのはそれから 4 年後となった。民族文化復興運動の全国組織であるモン青年会が例年村落持回りでモン民

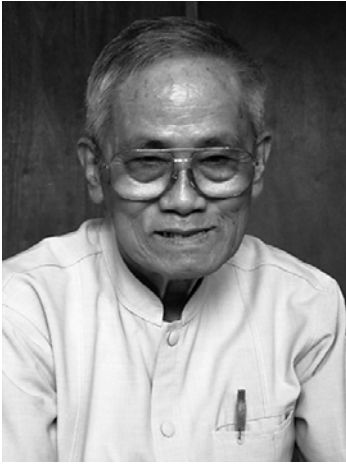


写真4 ブンミー氏



写真5 トー君

族記念日を開催しているが、今年はバンコクから最遠地のモン集住地であるこの村が選ばれた。私もこの祭典に参加した。北部の小さなモン村に全国各地から会員が集い、各々が華やかな衣装に身を包んで1年に1度の祭典を作り上げていた。

あの優しいブンミー氏にもう一度会いたかったが、残念ながら氏は既に亡くなってい

た。一方のトー君は、夕闇に包まれた祭典舞台のうえで舞踊の中央先頭に立ち、地元の子どもたちを率いていた。また、ミャンマーから来たモンの若者はタイでは外国人単純労働者として他者扱いされがちであるが、祭典に訪れたその団体一行を、トー君は自宅に招き宿泊場所として提供していた。世話好きも穏やかな性格も相変わらずであった。

一方、セーム君にはあのモン語説法のとき以来、今日まで再会を果たしていない。彼は出家生活をもう少し続けたかったが、果樹園経営をする両親を手伝わなければならないため、既に還俗したという話だけは聞いていた。

あの説法デビューから1年と数カ月経ったある日、私は、セーム君のいる村の隣村で他のモン寺の出家式に参列していた。その会場で地元の人に、在家者が出家予定者を祝福するバ・アヤン儀礼について尋ねていると、「そういやあ、向こうの方じゃあ、若いやつがバ・アヤンをやっているらしいな」という話を聞いた。バ・アヤンの出来る若者など聞いたことがなかったが、すぐにセーム君のことであると気が付いた。彼がまだ僧籍にあったころ、バ・アヤンの執行者である年配在家者の自宅を一緒に訪問し、モン語で書かれたその文句を複写させてもらったことがある。そうか、還俗した後も村の儀礼に携わっていたか、と思うと、神妙な顔をしてモン語を誦出する彼の姿が浮かんできた。

この青年2人は面白いことに、なんとない関心からモン語の担い手となったようだ。名誉欲や経済的な理由はおろか、言語継承や民族主義のためですらないように見える。し

たたかでも、抵抗に身を焦がす主体でもない。それでも、彼らは、いつの間にか感覚が慣れてしまった普段の日常について、それが拠って立つ社会の基盤や、緩慢な変化の彼方に忘れ去られる過去があることに気が付かせ

てくれる。そして2人は、研究書のような専門家同士の閉じた言論の世界と異なり、自らの存在をして、誰にでも手の届くところに批判的な視野をもたらしてくれる。

「民族多様性」の言葉の中にみる人々

—勝ち組か、あるいは負け組か—

佐井 旭*

自身の故郷である上海から日本に帰国してから、わずか2日後の深夜1時、ボルネオ島サバ州コタキナバルに降り立った。手荷物検査の担当者は、きちんとモニターを見ているのかどうか覗き込みたくなるほど、モニターから目を離して同僚と歓談しており、空港からしてアットホームな雰囲気である。もの寂しい出口を潜り抜けると、モワッとした、湿度が高く泥臭い空気が気管に流れ込み、それが長旅で疲れた身体に追い打ちを掛けた。思わず「きてしまったか」と内心漏らした。近くのtaxiチケットカウンターで切符を購入したら、なんと75リンギット（日本円約2,500円）と高額！？だが乗り込むのは小さく小汚いタクシーだ。降り立つまで

の「ボルネオ」のイメージといえば、自然豊かで経済発展の遅れた地域ということだったので、これは意外な価格だった。そうか、仮にもここは州都で、経済発展が著しいマレーシアの一部だと気付く。重たい瞼をかるうじて開けて、街燈が照らす街を眺めながら、揺れる車の意外な心地よさに身を委ねたのだった。

私の研究内容は、人々の生活習慣と肥満についてである。経済発展が急速に進むマレーシアでは、生活習慣病の温床としての肥満が問題視されている。ファーストフードやスナック等の西洋食文化の取り入れや炭酸飲料やシロップをはじめとした砂糖含有飲料の過剰摂取などといった食生活と、自動車の普及

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 セントラルマーケットを歩き交う人々

による運動不足などの影響を受け、生活習慣病が健康問題として深刻化しつつある。サバ州は比較的経済発展が遅れているため、国内では肥満率が低いほうであるが、むしろこれから発展が進むときに、他州の二の舞とならないために、研究が必要である。特に同州には他州とは異なる特徴があり、興味深い。まず、先住民が数多く存在するボルネオに位置する多民族な州である。その一方で、州都コタキナバルが近年急に観光都市として経済発展が進みはじめた。民族ごとの生態環境や社会経済的条件と生活習慣病との関連を明らかにするという、新たな研究のためには最適な場所であった。

ミス・コンテストの審査委員！？

さてコタキナバルに到着してわずか1週間、民族多様性の在り方を、ちょっと変わった形で体験する機会を得た。日本にいる間から連絡を取り合っていたホームステイ協会の会長に招待され、サバ州最北端に位置するクダットで行なわれる催し事に参加することと

なった。車を北に走らせること4時間あまり、既に会場は多くの人々で埋め尽くされていた。到着後来賓席に通されてから知ったのだが、今回のイベントは、サバ・観光大使を決めるミス・コンテストであった。なるほど、会場の熱気も納得である。その後、観客の男性陣から、好みの候補者への、大きな歓声に驚くことになる。さて、トロピカルフルーツの一種であるレンブ（ジャワフトモモ）を用いたものをはじめとする、色とりどりの郷土料理が次々と運ばれてきたが、それらには十分に手をつける時間もなく、別のテーブルに移動するよう言われる。数々の料理に名残惜しく別れを告げる一方で、期待と不安が入り混じった気持ちでいると、主催者でもあるホームステイ協会の会長から、コンテストの審査に参加してもらいたいと言われる。候補者はそれぞれの出身地から代表として選ばれてきていて、順に登場してランウェイでのウォーキングやポーズング、衣装の華やかさ、出身地のアピール、また各個人の特技を披露するというものだった。私はうろたえた。ファッション方面には無頓着ではないと自負しているが、いきなり、こちらに到着して間もない自分が、入賞者を決める大役を担わされることに対して、萎縮する思いだった。

特技披露のはずでは…？

だがどうやら、それほど深刻に悩まなくても良さそうだということがわかった。来賓には私の他に、同じく招待されたアルゼンチン人の写真家夫妻や、去年の優勝者、他数名が

いたのだが、実際審査に加わるのはこのうち女性の 6 名であり、アルゼンチン人の男性と私はオブザーバーという形で、彼女たちをアシストすることが役目であった。ひとまず安堵をしたが、それでも「アシストタント・ジャッジ」という肩書きなので、気を抜けないことに違いはない。

司会者のアップテンポなかけ声のもと、ついに第一セッションが始まり、続々ときらびやかな衣装に身を包んだ女性候補者が登場する。それぞれの女性の衣装には、出身地の川や星空などといった自然的特徴を取り入れたものが多く、見る者を魅了していた。登場する候補者は外見的特徴もそれぞれ異なり、存在する民族多様性を垣間みることができた。

ここでちょっとした事件発生。各候補者が特技である歌や楽器演奏といった音楽を披露するセッションに突入するのだが、ある候補者はエレクトーンで弾き語りをするが音を何度も外してしまい、あきらかに音程もよいとは言いがたかった。伝統的楽器である太鼓を演奏した別の候補者は、ほんの数回だけ叩いて終わりだった。地方都市にすれば大きなイベントであり、会場も満席で、彼女たちが緊張するのも無理はない。しかし、仮にでも各地域を代表してきているのであるから、もう少し「特技」といえるほどに、準備をしてきているものではないのか。だが観客席のリアクションもすごかった。たとえば音を外した候補者には、失敗するごとに男性陣があらん限りの大歓声の嵐を起こした。沈鬱な空気になるはずが、実に痛快なまでに明るいのであった。この調子で最終セッションまで終了し、

表彰式へ。イベントのクライマックスは、さぞや盛り上がると思いきや、表彰式自体にはあまり興味を示さず続々と席を立つ観客。一方で入賞者を発表した直後には予め録音されたと思われる拍手音が流れたのだった。

エピローグ—民族多様性の中の事実

サバ州には実に約 32 の民族が暮らしている。最大多数とされるカダザン・ドゥスンやサバの民族構成の第 2 位を占める華人系、海岸沿いを中心に生活を形成するバジャウの他、数多くの少数民族が存在する。そして、下層労働力になるというフィリピンやインドネシアからの不法移民なども数多く住む。彼らはそれぞれ独自に文化や生活様式、世界観を形成してきた。外を一步步けばさまざまな言葉を耳にし、彼らの日常を垣間みることができる。街の喫茶店で茶を飲み談笑する華人。街行く人々に大声で出発先を連呼しバスへの乗車を促すマレー人男性。これだけ多くの民族を擁するこの国・場所において、彼らをマレーシア人として結びつけているひとつ



写真 2 華人系が経営する喫茶店にて



写真3 コタキナバル郊外 Papar にて

の要素は「マレー語」である。それぞれ異なる母語をもっている、国語のマレー語も話せるバイリンガルは当たり前で、英語を話せたり、複数の母語をもったりなどするマルチリンガルもいる。マレー語は公用語としての英語よりも率先してコミュニケーションの際に用いられ、それぞれ異なる出身の人々を繋げている。

サバ州では、「32もの民族が仲良く暮らしている」というフレーズも使われるほど、民族多様性の豊かさが、観光キャンペーンに用いられている。しかし、そのフレーズとは異なる姿を目にしたこともある。たとえば、華人系が経営する喫茶店には華人系以外の客の

姿はほとんどいない。中国語で書かれたメニューを眺めながら店内を見渡すと、客として座っているのは華人だが、忙しく店内を歩き注文をとるマレー系やフィリピン出身の人々がいる。一見、「同じ空間」を有しているのには間違いない。しかし、店を有する華人や、客としてお金をつかう華人に対し、労働している他民族の人々に、身分的格差を感じる。これは、華人系家族が客としてきており、ともにテーブルについている他民族の女性はその家の家政婦だということにも、同じことを思う。一方、政府が進める「ブミプトラ政策」では、学業や社会保障などさまざまな面で、華人系以外の人々への優遇措置がとられている。華人系の人々は、他民族の人々と婚姻関係をもたない限り、その恩恵の享受を得ることはできない。

このブミプトラ政策によって、「32もの民族が仲良く暮らしている」というフレーズが、果たして「実質的」事実となりうるのだろうか？私自身も、ルーツを辿ると彼らと同じ華人である。彼らに親しみを感じつつ、民族多様性の中に隠された現状に対し複雑な心境を抱えるのであった。

「薬をください」

—ザンビアの農村における医療事情—

吉村友希*

「ペレニコ ウムティ (*Peleniko umuti*)」
ザンビア共和国北部にあるベンバの人の村に滞在している間、私はこの言葉にずっと悩まされていた。ペレニコは日本語で「ください」、ウムティというのは「薬」を意味するベンバ語の言葉で、「ペレニコ ウムティ」というのは「薬をください」という意味である。「頭が痛いから痛み止めが欲しい」、「マラリアなんです、薬をください」。そう言ってたくさんの村人が訪ねてくることに、私は困惑していた。村の人たちは、日本から来た私は薬をたくさん持っていて、日本の薬はよく効くものだと認識しているようだった。

明らかに具合が悪い様子で、つらい症状を訴える人もいたが、「しんどそうな顔」を作って私のところへやってくる人もいた。薬を持っているならば気前よく分けてあげればいいと思うかもしれないが、3ヵ月間の滞在のために私が持参した薬の量は、村の人たちに配るには足りない。また、私には薬の専門的な知識がないため、副作用やアレルギーが発症する可能性を考えると、不用意に薬を渡すことに抵抗を感じていた。そしてなにより、外国人に欲しいと言えば物がもらえる、

という風に思われたくないという気持ちが強かった。どのような対応をすることが正解なのか分からずに悩み続けながら、「薬は持っていません」、「もうなくなりました」と嘘をついて、その場をやり過ごしていた。薬がもらえないと聞いて、「薬をくれないなら、あんたに用はない」とでもいうかのようにその場を立ち去る村人のことを、複雑な気持ちで見送ったことが何度もあった。

頻繁に薬をもらいにくるということは、薬へのアクセスがないということだと考え、私は、この村の医療事情は相当悪いのだろうと思い込んでいた。そんな矢先、お世話になっている調査助手の3才の娘ナンシー（仮名）が高熱を出した。いつも元気に走り回っているナンシーが、つらそうにしている姿を見て、私は薬をあげるべきかどうか、とても悩んでいた。明朝になっても熱が下がらなかったため、ナンシーの母親は、「クリニックに連れて行く」と言って娘を背中に背負い、朝から自転車で出かけて行った。

夕方になって、ナンシーと母親は、子ども用のマラリア治療薬と「パナード」という鎮痛解熱剤を持って家に帰ってきた（写真1）。クリニックで検査を受け、マラリアにかかっ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ていると診断されたそうだ。「検査と薬のお金はどうしたのか？」と聞くと、無料だという。医療へのアクセスが何もないと思っていた私はこの話を聞いて驚いた。村人は、無料で薬をもらえるにもかかわらず、なぜ私のところに「薬をください」と言って来るのか！？ いったいこの村の医療事情はどうなっているのか？ 疑問に思った私は、この村をとりまく保健や医療事情について調査をすることにした。

村の人がいう「クリニック」というのは、正式にはヘルスセンターと呼ばれるもので、国の医療機関である。ザンビアの保健制度では、医療機関が5段階に分かれている [Ministry of Health 2013]。レベル1~3までに区分された病院（ホスピタル）があり、その下位にヘルスセンターが位置する。末端機関には後述するヘルスポストが位置づけられている。ヘルスセンターは、都市に409カ所、農村部には1,131カ所存在し、都市部にあるアーバンヘルスセンターと、農村部にあるルーラルヘルスセンターの2つのタイプ

に分類される。ヘルスセンターで受けられるのは簡単な診断や処置に限られており、手術を実施するような設備は整っていないため、十分な医療が受けられるわけではない。ただし、受診料や薬代はかからず、誰もが診察を受けることができ、薬にアクセスできるようになっている。

調査地域にあるヘルスセンターを訪れたところ、診察が始まる前に、既に患者が開院を待っていた（写真2）。来院者の多くは、子どもを連れた母親であった。ヘルスセンターには看護師が1人と、専門家ではないスタッフが2人しかおらず、人員不足が課題であった。また、国から配分されるはずの薬やマラリアの検査薬などが不足している状況で、十分な医療を受けられる環境ではないことも分かった。しかしながら、設備が整わないなかでも、「アンダーファイブ」と呼ばれる5歳以下の子どもの定期健診や、妊産婦の健診や指導などを実施しており、「特に妊産婦への健康指導が一定の成果をあげていて、出生児や妊婦の死亡率が下がっている」と、看護師は話した。

もうひとつ、私が滞在する地域にはヘルス



写真1 村のヘルスセンターで配布されている鎮痛解熱剤（左）と子ども用のコアルテム（右）



写真2 ヘルスセンターとその開院を待つ人びと（ザンビア、ムチンガ州ムピカ県）

ポストと呼ばれる保健施設がある。ヘルスポストはザンビアの医療機関の 5 段階のなかで最も低いレベルにあたり、専門家ではなく、村人のひとりが、数週間のトレーニングを受けて、認定されたコミュニティ・ヘルスワーカーとして働いている。コミュニティ・ヘルスワーカーは、国から供給される薬を管理して、必要な人に与えたり、月に 1 回、村人を対象に、保健の知識を伝える勉強会を開いたりしている。ヘルスポストにも課題は多く、国からのサポートが十分ではないため、薬の不足や、妊産婦の健診を実施するためのベッドなどの設備が未整備であることなど、問題が山積している。それでも、村の人たちが最初にアクセスできる保健施設として大切な存在で、具合が悪くなって薬が欲しいときに村人が最初に訪れるのが、このヘルスワーカーのところである。

また、国の医療施設とは別に、現在では、村のグロッサリー・ストアで薬を購入することができる。調査地には、村人が経営する複数のグロッサリー・ストアが存在しており、鎮痛解熱剤であるパナードや、フラジールというアメーバ赤痢の治療薬など、2~3 種類の薬を手に入れることができる。価格は 1 クワチャ程度（日本円でおおよそ 20 円）であり、村人でも手の届く価格で販売されていた。

このように調査をした結果、私が想像していたよりも、ザンビアの農村の保健医療は制度が整えられていることが分かった。もちろん、十分な医療制度が整っているとはいえ、実際に病院へ行けないことや、必要な薬がなかったせいで命を落とした人もいる。医

療従事者や医薬品の不足は、ザンビア全体として大きな問題であり、まだまだ人命がきちんと救えるような状況にまでは至っていない。調査地に一番近い街の大きな病院でも、処方する薬の在庫がないために適切な処置が施されず、命を落とす人が出ているという話をよく耳にした。

さらに、村人が保健や医療に関する知識を十分にもっていないという課題がある。たとえば、薬の飲み方をみていると、用法や用量を守らない人が多い。先に例として紹介したナンシーは、マラリアにかかって「コアルテム」という薬をヘルスセンターで処方された。コアルテムというマラリア治療薬は、一定の時間をあけて、処方された量を完全に飲みきる必要がある。ヘルスセンターで用法の説明を受けていたにもかかわらず、ナンシーの母親はそれに従ってはいなかった。たとえ制度が整い、薬にアクセスできるようになったとしても、それらを有効活用していくためには、村人への知識の伝達が次の課題になってくるだろう。

問題が山積しているとはいえ、薬や診察にお金がかからない制度には驚いた。国際社会や NGO による援助や支援が、この制度の背景にあるのだろう。たとえば日本政府は、「母と子供のための健康対策支援プログラム」に約 5 億円を供与して、ザンビアの地方の子どもの健康改善や、予防接種体制の強化を支援してきた。さらに、コミュニティ・ヘルスワーカーを中心としたプライマリー・ヘルスケア強化のための資金提供やワクチンの供与、保健分野に関わる人材の派遣などを通し

て、ザンビアの保健セクターへの援助を実施している。

遠いアフリカで医療を受けられずに困っている人のために何かしたいという「誰か」の思いが通じて、村の医療制度の改善につながったということなのか、と私は考えていた。しかし、村の人には「支援されている」というような意識はあまりないように思えた。ヘルスセンターに行けば無料で診察を受けられて、無料で薬を処方してもらえするという状況は、彼らにとっては普通のことなのである。ある日、私が「首都でマラリアの薬を買った」と話すと、「その薬買ったの？病院に行けば無料でもらえるよ？」と村人が少し驚いていた。

また、ヘルスセンターで働く職員に話を聞いたときにも、「薬が足りない問題は、きっと政府がなんとかしてくれる」と、自分ではない「誰か」が問題を解決してくれるのを待っている状況であった。「自分から動かな

くても、政府や外国人が良いものをもってきてくれる」、「問題があれば、誰かが解決してくれる」。保健や医療について、村の人たちにはそういった意識があるように感じられた。ベンバの村での経験は、「与える」ということの意味を考えさせてくれた。

2013年6月に開催された第5回アフリカ開発会議（TICAD V）で、日本政府は、アフリカの保健システム強化や栄養改善に対して支援していくことを表明している。これから日本を含む国際社会は、アフリカの医療とどんな姿勢で向き合っていくのだろうか。

「薬をください」にどう答えるべきなのか、私にはまだ正解がみえていない。

引用文献

Ministry of Health. 2013. *The 2012 List of Health Facilities in Zambia: Preliminary Report (Version No. 15)*. Lusaka, Zambia.